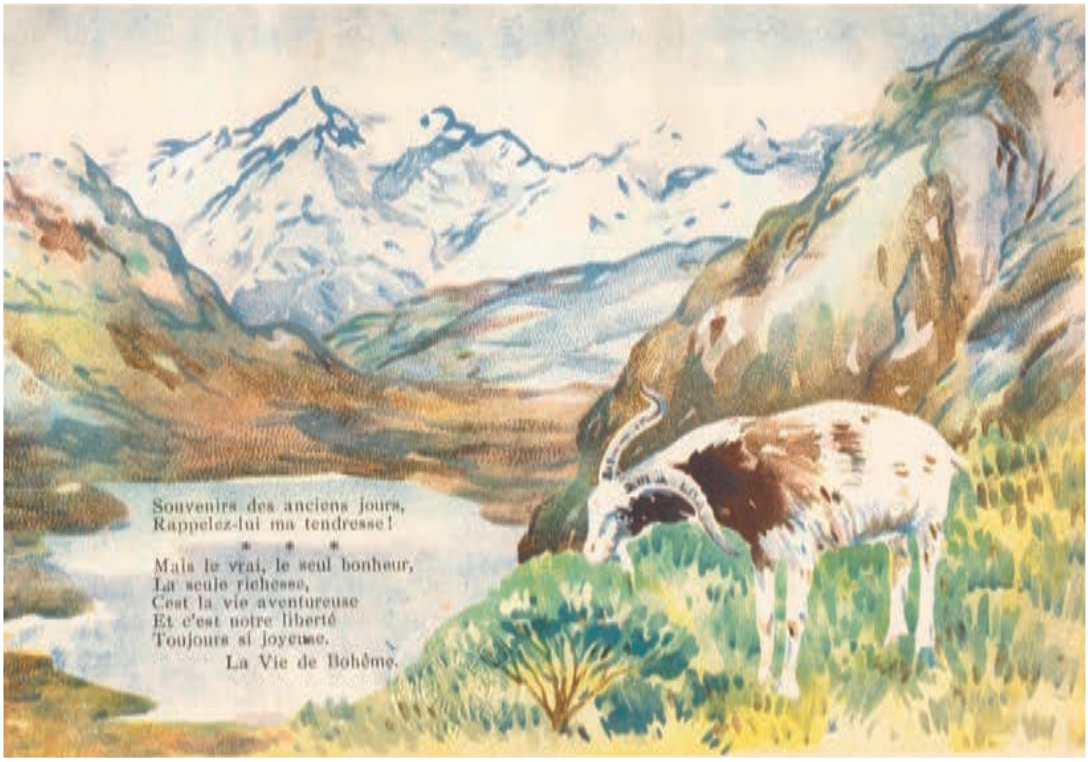
国立国会図書館月報

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2022.2



本の森を歩く　明治・大正の園芸雑誌と近代園芸の啓蒙者たち

電子資料の長期保存 ABC

国立国会図書館で働いてます　Season2

730 号　2022 年 2 月

国立国会図書館月報

NO. 730
FEBRUARY 2022

CONTENTS

1 *INAKA*—山と遊んだ居留外国人たち
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

6 本の森を歩く　第27回
明治・大正の園芸雑誌と近代園芸の啓蒙者たち

19 電子資料の長期保存ABC
そのディスク、まだ読めますか？

24 国立国会図書館で働いてます　Season2　no.5

28 ミニ電子展示「本の万華鏡」第30回
天下タイ平　～魚と人の江戸時代～

18 館内スコープ
黒子ときどき夜当番

30 本屋にない本
『全国出版協会70年史』

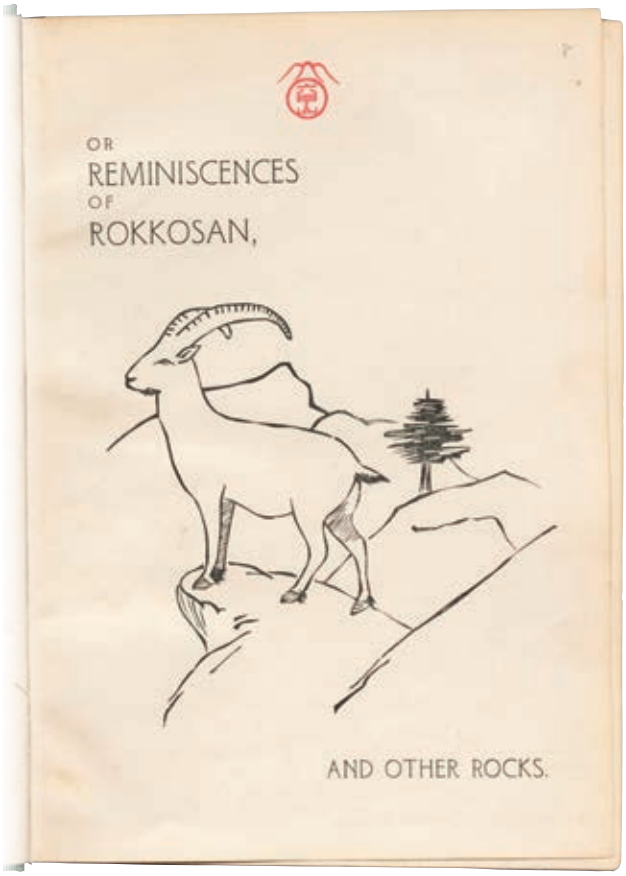
31 NDL Topics

表 紙：*Inaka, or, Reminiscences of Rokkosan and other rocks vol.15*
大正 10　23cm
<請求記号 Ba-627>

今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

INAKA—山と遊んだ居留外国人たち

益本禎朗



（右）1巻の標題紙。The Mountain Goats of Kobeの機関誌らしく山羊が描かれ、*INAKA*のサブタイトル「六甲山とその他の岩山の思い出」が記載されている。
（左）9巻より。ドーントが撮影した登山風景。

Inaka, or, Reminiscences of Rokkosan and other rocks vol. 1-16, 18
collected and compiled by the Bell Goat, Kobe Herald, 1915.6-1924.6, 17冊 ; 23cm<請求記号 Ba-627>

神戸には毎朝山に登る人たちがいる。「毎日登山」とよばれるこの文化は、明治・大正期に神戸で暮らした外国人たちの六甲登山から生まれ、昭和の初めには2万人以上が実践し、最近でも4000人ほどが習慣にしているという。[1]

今回紹介する*INAKA*は、毎日登山の起源となった居留外国人たちの登山やゴルフの話題を中心にさまざまな記事や記録を収めた英文雑誌である。登山団体The Mountain Goats of Kobe（神戸カモシカ倶楽部）[2]の機関誌として18巻まで刊行され、編集は同クラブのリーダーだった英国出身のH. E. ドーントが行った。収録された内容はドーントの活動や関心、交友関係にそくしたものになっているので、彼の歩みとともに*INAKA*を紹介しよう。

そもそも外国人が六甲山に登ったのは、明治6（1873）年のウィリアム・ガウランドとアーネスト・サトウらが初めてとされている。その後、神戸の居留外国人も増え、明治30（1897）年頃になると、彼らは毎朝布引の茶店付近まで登山するようになっていたという。日本文化を愛し『日本精神』『おヨネとコハル』などの著作を残したモラエス（Wenceslau de Moraes）もその一人で、彼は茶店で働く姉妹の1人に恋をし、足しげく店に通っている。ドーントがバキューム・オ

1巻より。（右）H.E.ドーント、（左）The Mountain Goats of Kobeのメンバーら。
写真からもわかるとおり、六甲の山を登る際に彼らは犬を連れていた。また、彼らはメンバー同士や登山道に愛称をつけていたが、犬たちのことも「高貴なお髭連中（The Noble Whiskers）」という愛称で呼んでいた。

（右）1巻より。毎号表紙にも印刷されている六甲山のシンボルマーク。
（左）13巻より。ドーントが撮影した六甲山上の風景。

イル社の支配人として神戸にやって来たのは、そのような時期であった。

ドーントは来日後間もない時期から六甲山に登り、やがて登山仲間らと神戸カモシカ倶楽部を結成する。彼らの六甲登山の活動は、六甲山上のゴルフ場が閉鎖される冬の時期に行われ、春から秋にかけてはそれぞれゴルフや登山旅行などを楽しんだ。*INAKA*所収の活動記録によると、六甲登山は週末だけでなくクリスマスや正月などの祝祭日にも行われており、特にドーントと親友J.P.ワーレンはそのほとんどに参加している。彼らはいつも山上にあるドーントの別荘で昼食をとり、シーズンの開始日と終了日にはパーティも開いた。また、メンバーのうちドーントやJ.G.S.ゴースデン、長野武之丞らは赤石岳（3、121m）や剱岳（2、999m）、鳳凰三山（2、841m）など全国各地の山々にも登っている。

このように休日の多くを山上で過ごしていたドーントが、山好きな友人たちとの行楽や未踏の地の探索を記録に残しておきたいとの思いから刊行したのが*INAKA*である。大正4（1915）年の第1巻刊行を皮切りに年1、2冊のペースで出版され、発行部数は100～150部ほど。その多くは登山やゴルフの仲間たちに配られた。写真やイラストが付い

（左上）9巻より。大正7（1918）年1月1日にドーントが撮影した登山中の1コマ。*INAKA*には同日の登山記録があり、ドーントとワーレンの二人が参加して途中デイビスという人物と合流したこと、気温は華氏36度（摂氏2度）だったことなどが書かれている。なお、ドーントとワーレンは翌日も翌々日も山に登っている。

（右上）8巻より。大正6（1917）年10月14日、ドーントが登山仲間のJ.G.S.ゴースデン、長野武之丞らと鳳凰山・地蔵岳を登攀した際の様子。地蔵岳のオベリスクは明治37（1904）年にウォルター・ウェストンが初登頂し、ドーントらは第3登（外国人としては第2登）であった。

（右）15巻に掲載されたドーントの登山記録の一部。

Akadake (Hida)	9593 ft.	July	21st, 1918
Akaishisan	10145 ft.	Aug.	26th, 1915
Ariakesan	7500 ft.	July	17th, 1916
Asamayama (Shinshiu)	8130 ft.	Aug.	27th, 1905
Asosan	5222 ft.	Nov.	24th, 1904
Atagoyama	2900 ft.	Dec.	25th, 1916
Bessan	9462 ft.	July	17th, 1919
Daibaradake	8796 ft.	July	18th, 1920
Daigadake (Hakone)	3500 ft.	Aug	30th, 1895
Daikokudake	7696 ft.	July	18th, 1921
Daisen	6150 ft.	Sept.	29th, 1920

た1冊100頁前後の雑誌で、価格は5円～7円50銭と高価であった。最も紙幅が割かれているのは登山関係の報告・記録だが、ウォルター・ウェストンなどと交わした私信や新聞記事等も掲載されており、その雑駁さから、*INAKA*はドーントの思い出が詰まったスクラップブックのような趣もある。なお、タイトルの*INAKA*とは「条約港の外国人居留地の外にある地域すべて」を指した言葉だという。

*INAKA*の表紙は7巻まで緑一色だったのが、8巻以降は青や赤も使われ、時には文字が銀箔だったりと趣向が凝らされている。最終巻は創刊号と同じ緑に。表紙右下に記された「BELL GOAT」はH.E.ドーントの愛称で、クラブのメンバーにはそれぞれ「～Goat」という愛称がつけられた。Bell Goatは鈴をつけた山羊、つまり登山のリーダーの意味だと解されている。

8巻より。ドーントは詩や絵画も嗜んでおり、「The Golf of Rokkosan」と題されたこのイラストも彼が描いたものである。西村貫一はドーントが帰国する際に蔵書を譲り受け、それをもとに日本初のゴルフ史書『日本のゴルフ史』を書いたが、同書見返しにはこのイラストが使われている。

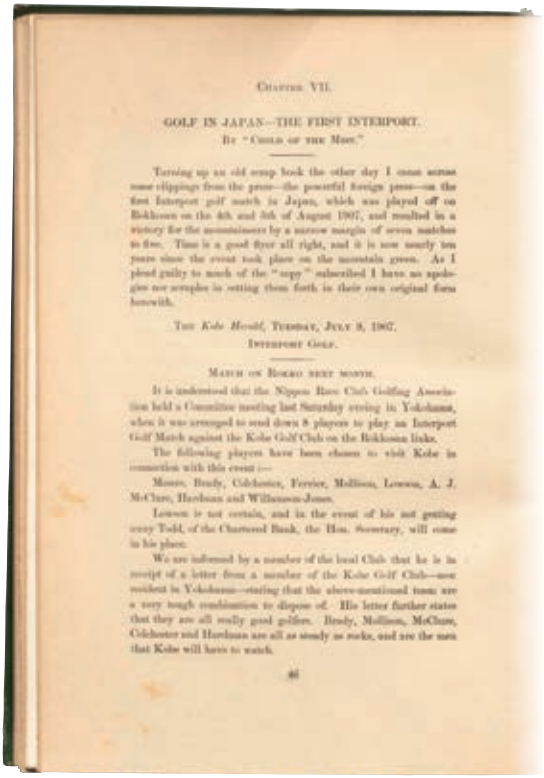
また、*INAKA*は冒頭で触れたとおりゴルフ関連の記事も多い。これはドーントが六甲山を拠点に活動するゴルフクラブにも所属していたためである。彼はクラブのキャプテンを務めるなどゴルフの腕も一流だった。*INAKA*には、神戸と横浜のクラブ対抗試合や日本アマチュアゴルフ選手権など日本のゴルフ草創期の様子を伝える記事のほか、ドーントとワーレンが早朝4時から11時間超プレーしたエピソードなども掲載されている。

登山やゴルフに熱心に取り組んでいたドーントだが、大正10（1921）年、彼は六甲登山中に両膝を怪我してしまう。おそらく怪我のせいだろう、登山やゴルフをした形跡はこれ以降見られなくなる。ただ、*INAKA*の出版だけは大正13（1924）年まで続けられた。ゴルフの18ホールにこだわって刊行を続けていたのか、最終18巻の謝辞では「*INAKA*はついにコースを走り終わった！」と感慨が綴られている。

その後、ドーントは日本を離れてしまうものの、彼ら居留外国人による山登りは現在に続く文化や活動の大きな端緒となった。ドーントらに触発されて日本人たちも新たに登山会を組織し、そこから数多くの登山団体が神戸で生まれ、次第に毎日登山も定着していった。また、シュラインロードやトエンティクロスなど、ドーントらが愛称で呼んだ六甲の登山道は今もその名が使われている。

ドーントら居留外国人たちは何を思い六甲の山に登っていたのだろうか。*INAKA*に掲載された、ある記事の一節を引いて終わりたい。

> 神戸で暮らす外国人は（中略）徒歩旅行愛好家になり易い傾向があります。（中略）1時間でも朝の散歩をすれば、海抜2,3000フィート［2000～3000フィート］の山に登ることができ、山頂で澄んだ大気を吸って家に帰ってくることもできます。それからひと風呂浴びて、全く爽やかな気分で朝食を済ませ、いよいよ1日の仕事に出かける、こんな生活を楽しめる土地は果たして神戸以外にあるでしょうか。



CHAPTER VII.

GOLF IN JAPAN—THE FIRST INTERPORT.
BY "CHILD OF THE MIST."

Turning up an old scrap book the other day I came across some clippings from the press—the powerful foreign press—on the first Interport golf match in Japan, which was played off on Rokkosan on the 4th and 5th of August 1907, and resulted in a victory for the mountaineers by a narrow margin of seven matches to five. Time is a good flyer all right, and it is now nearly ten years since the event took place on the mountain green. As I plead guilty to much of the "copy" subscribed I have no apologies nor scruples in setting them forth in their own original form herewith.

THE *Kobe Herald*, TUESDAY, JULY 9, 1907.
INTERPORT GOLF.

MATCH ON ROKKO NEXT MONTH.

It is understood that the Nippon Race Club's Golfing Association held a Committee meeting last Saturday evening in Yokohama, when it was arranged to send down 8 players to play an Interport Golf Match against the Kobe Golf Club on the Rokkosan links.

The following players have been chosen to visit Kobe in connection with this event :—

Moore, Brady, Colchester, Ferrier, Mollison, Lowson, A. J. McClure, Hardman and Williamson-Jones.

Lowson is not certain, and in the event of his not getting away Todd, of the Chartered Bank, the Hon. Secretary, will come in his place.

We are informed by a member of the local Club that he is in receipt of a letter from a member of the Kobe Golf Club—now resident in Yokohama—stating that the above-mentioned team are a very tough combination to dispose of. His letter further states that they are all really good golfers. Brady, Mollison, McClure, Colchester and Hardman are all as steady as rocks, and are the men that Kobe will have to watch.

6巻より。明治40（1907）年8月に初めて開催された神戸と横浜のクラブ対抗試合（インターポートマッチ）での集合写真と、その関連記事。第1回は六甲で行われ、ドーントはクラブのキャプテンとして開催の手配に奔走し、選手としても出場した。

18巻の末尾付近に掲載された作品たち。ドーントは「仲間たちとの登山」「夕暮時の山景」をテーマにしたこれらの絵が*INAKA*の最後を飾るのにふさわしいと考えたのだろう。

1「毎日登山 朝から爽快、もらう元気」『朝日新聞』2017年1月4日朝刊（神戸・1地方）25面を参照。

2 Mountain Goatの訳は「山羊」だが、日本に野生の山羊がいないため「カモシカ」と訳された経緯があり、現在でも踏襲されている。松村寿「神戸カモシカ倶楽部山日記」『山書研究』26号、荒武叶子「六甲山における近代登山の変容」『兵庫地理』65号の注6を参照。

○参考文献

棚田真輔 編著、松村好浩 監訳『神戸背山登山の思い出』交友プランニングセンター　1988<請求記号 GC169-E9>

棚田真輔［ほか］共著『プレイランド六甲山史』出版科学総合研究所 1984<請求記号 FS41-349>

棚田真輔［ほか］著『居留外国人による神戸スポーツことはじめ考』神戸商科大学経済研究所　1996<請求記号 FS22-G21>

棚田真輔 著『居留外国人による神戸スポーツ草創史』道和書院　1981（再版）<請求記号 FS22-H33>

新修神戸市史編集委員会 編『新修神戸市史 生活文化編』神戸市 2020<請求記号 GC169-M9>

高木應光 著『神戸スポーツはじめ物語』神戸新聞総合出版センター 2006<請求記号 FS22-H59>

荒武叶子「六甲山における近代登山の変容」『兵庫地理』65：2020<請求記号 Z8-3209>

『六甲山に行こう』（別冊山と渓谷通巻443号）山と溪谷社　2005<請求記号 Y94-H12844>

Kwan-Yichi Nishimura: *A bibliography of golf based on the compiler's private collection of golf literature* Masamori Nishimura [1974?]<請求記号 FS1-5>

西村貫一 著『日本のゴルフ史 第2版』雄松堂書店　1995<請求記号 FS35-G83>

本の森を歩く　第27回

明治・大正の園芸雑誌と近代園芸の啓蒙者たち

中嶋　恵子

はじめに

2月は園芸好きにとって心躍る季節です。シクラメンにパンジー、ビオラが華やかに咲き、そこに水仙やクリスマスローズも加わります。園芸店にいけば、ブルーデージーやラナンキュラスなど、温室栽培で一足早く開花させた花々があふれ、寒風の中であっても春の訪れを予感させてくれます。

そして、そうした花々の栽培の手引書となり、また美しく育てやすく改良された最新の園芸品種を紹介してくれるのは、各種の園芸雑誌です。

園芸を事業として行うにせよ、趣味として楽しむにせよ、さまざまな情報が必要になります。明治時代以降、日本では世界中にルーツを持つ園芸植物が輸入され、栽培できるようになりました。原産地の土壌や気候に適応した植物を日本に持ってきて栽培しようとすれば、当然に難しいことがいろいろと起こります。肥沃な土を好む植物もあれば、嫌うものもあります。日本の夏の高温多湿や冬の寒さに弱いもの、乾燥気味な土を好むもの、直射日光に弱いものなど、栽培に当たってはそれぞれの植物の性質を考慮する必要があります。それに加え、病害虫についての知識もないと、ただただ途方にくれることになります。

日本で初めて園芸雑誌が登場するのは、明治時代の半ばです。本稿では、明治から大正時代にかけて創刊された3誌の園芸雑誌と、それらの発行に情熱を注いだ編集者たちを中心にご紹介します。

しかし、ひとくちに園芸といっても、実はいろいろな分類方法があります。栽培するものに着目して花卉（かき）園芸（観賞用植物）・果樹園芸・蔬菜（そさい）園芸（野菜）に分けることもできますし、栽培目的に着目して生産園芸・趣味園芸に分けることもできます。さらには、ワインなどの加工園芸、造園、フラワーアレンジメントといった分野もあります。[1] 都市で生活する人なら、店先を飾るリースから街路樹に至るまで、目にする植物のほとんどが園芸の賜物といってもいいのではないでしょうか。

このように非常に多様な園芸の世界ですが、本稿で園芸雑誌として紹

「大隈伯爵邸内温室の図」（山本松谷画）。右下に描かれた男性は大隈重信と思われる。
『風俗画報』273号　東陽堂　1903.8< 請求記号 雑 23-8>

介するものは、花卉園芸を中心とし、果樹園芸と加工・装飾園芸を取り上げたものが多くなっています。

また、この時代の園芸雑誌は近代園芸の啓蒙期ということもあってか、対象とする読者層を生産者と愛好家に明確に分けようとしていない傾向が見受けられます。西洋などから導入された新しい植物の栽培や、海外への日本の植物の紹介といった新しい試みに対し、双方の知識と経験を寄せ合い、日本の園芸界全体の発展を図るための「場」として機能することを期待されていたとも考えられます。

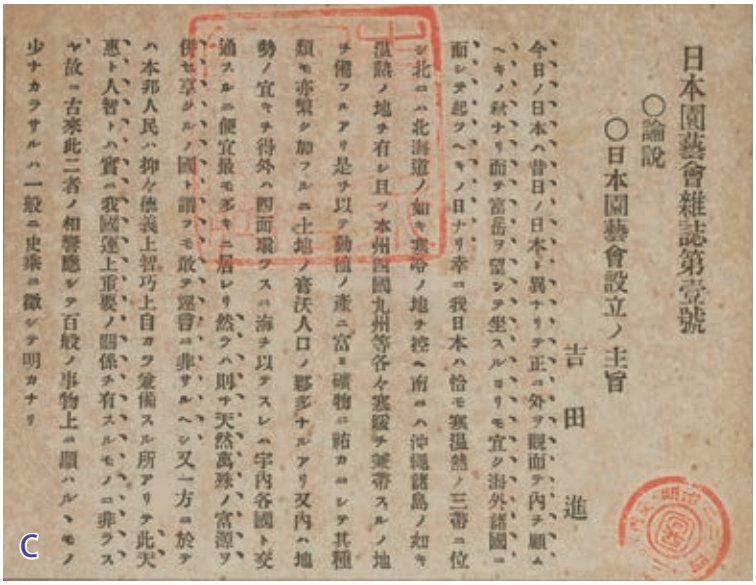
日本初の園芸雑誌『日本園芸会雑誌』（明治22年4月～昭和19年9月）

日本における園芸雑誌の嚆矢（こうし）は、明治22（1889）年4月に創刊された『日本園芸会雑誌』（のちに『日本園芸雑誌』に改題）です。日本初の園芸団体である日本園芸会の発足に伴い、その会報として創刊されました。

明治政府は、明治初年から西洋の優れた植物を輸入し、内藤新宿試験場や三田育種場、各地の官園などで栽培を試みてきました。明治14（1881）年には「農業の経験や知識の交換を通じて農事の改良発展を図る」ことを目的に大日本農会が設立されましたが[2]、園芸は農業の一部門とされつつも、立ち遅れた存在となっていました。

日本園芸会は、園芸事業の改良発達を図ることを目的として明治22年2月に設立され、初代会長には農商務次官などを務めた花房義質（はなぶさよしもと）が就任しました。2代目会長には園芸好きで知られる大隈重信が就任し、21年にわたって務めました。大隈邸は会の集会・品評会などの催しの会場となることもしばしばで、菊の栽培や希少な熱帯のランなどを集めた温室は、当時の園芸界でも有名でした。また、副会長は博物学者の田中芳男の他、前田正名や福羽逸人（ふくばはやと）など、当時の殖産興業、園芸界を牽引する著名人が務めました[3]。

しかし、会の発起人は意外にも園芸関係者でも著名な学者や官僚でもなく、吉田進という翻訳・通訳を本業とする人物でした。



A 吉田進肖像。
『実際園芸』16巻8号＜請求記号 雑40-13＞
B『日本園芸会雑誌』（以下同）1号表紙。
C「日本園芸会設立の主旨」（1号）。

生い立ちなどに謎の多い人物ではありますが、昭和7（1932）年に『実際園芸』[4]が行った吉田へのインタビューの中で、雑誌を始めた経緯について語っています。それによれば、かつて語学を教わっていたフランス人のサラゼンや、政府の法律顧問を務めていたボアソナードなどとの交流から、欧州には「日本の植木屋と百姓を一所にした様な学問だか、技術」があることを知り、園芸に興味を持ったそうです。その後、官僚の欧州渡航に同行した際に目撃したヨーロッパの先進的な園芸事情に深い感銘を受け、日本の園芸もどうにかしないといけないと思ったのが、日本園芸会を発足させる動機になりました。

特に吉田を行動に駆り立てたのは、日本の菊について言及した、フランスの園芸協会総裁の演説です。フランスでより優れた品種に改良して、逆に日本に輸出しようという内容だったため、大いに心を動かされました。[5]そして帰国後、日本園芸会を発足させ、その会報である『日本園芸会雑誌』を創刊しました。

創刊号の冒頭に掲載された「日本園芸会設立ノ主旨」にはその意気込みがあらわれています。

今日ノ日本ハ昔日ノ日本ト異ナリテ正ニ外ヲ観而テ内ヲ顧ムヘキノ秋ナリ　而テ富岳ヲ望ンテ坐スルヨリモ宜ク海外諸国ニ面シテ起ツヘキノ日ナリ

このように始まる文章のなかで、吉田は日本の園芸の強みとして、北海道から沖縄に至るまでの変化に富む気候帯と、ユリやツバキなどのように欧米諸国を魅了する多彩な固有植物の存在を挙げています（実際、日本には7千種類におよぶ植物が自生し、そのうちの約4割が固有種です）。[6]こうした強みを生かし、海外から輸入した優良な品種を国内の栽培適地で繁殖し、逆に海外に輸出すること、日本固有の植物を改良して海外に輸出することを奨励しています。

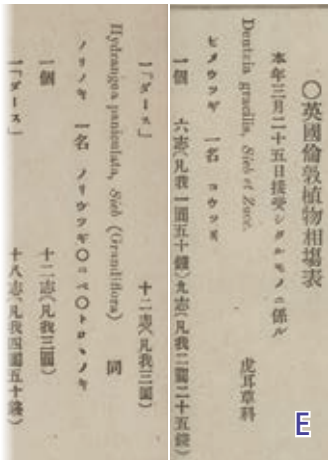
以後、明治39（1906）年に退くまでの18年間、吉田は編集作業などを中心となって担い、資金不足に際しては、自らの本業である翻訳によっ

D 日本の西南地方に分布するナゴランの解説とスケッチ。欧米諸国における評価や価格にも触れている（1号）。

E「英国倫敦植物相場表」（1号）。

F 外国語が併記された表紙（16号）。

G 福羽逸人が栽培したラン科の植物（29号）。



て得た収入で補填することもありました。面白いことに、日々多忙にしていて、自分で植物を育てることはなかったそうです。しかし、その語学力を生かし、海外の園芸雑誌や専門書などから得た知識を元に、多くの記事を執筆しました。

『日本園芸会雑誌』の大きな特色は、海外、特に欧米諸国を強く意識した編集です。欧米の園芸事情や園芸イベントの紹介、国内外の植物の相場表など、海外に目を向けた記事が多く掲載されており、日本の園芸界が世界に打って出るために必要な情報を提供しようという想いが伝わってきます。その他に、識者による学術的な記事や現在の園芸雑誌にもみられる「年中園事」（その月に必要な植物ごとの作業解説）といった実践的な記事もあります。また、吉田は海外への雑誌の頒布による日本の園芸植物の広報も想定していたため、表紙に英語・仏語・独語で雑誌名等を併記する試みも行われました。

創刊から56年にわたり、日本の園芸技術、園芸事業の発達に大きく貢献した一誌です。

『日本園芸会雑誌』の創刊後には、園芸上の知識を一般社会に普及することを目的とした『園芸之友』（日本園芸研究会、明治38年創刊）や家庭生活を豊かにするための婦人教育として、園芸を推奨する『家庭之園芸』（家庭の園芸社、大正2年創刊）、生産者・農学生向けに実用的な新知識の啓蒙を目的とした『農業及園芸』（養賢堂、大正15年創刊）など、さまざまな園芸雑誌が発行されました。その中でも筆者が興味を引かれたものを2誌挙げるとすれば、それは明治末に創刊された『園芸』と大正末に創刊された『実際園芸』です。

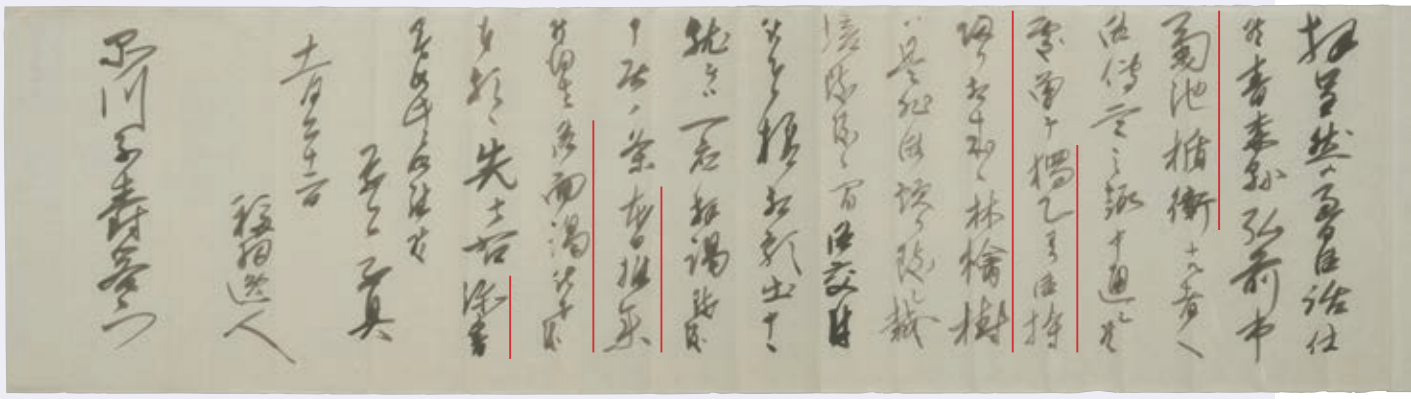
福羽逸人の書簡―りんごの樹を巡って

自身で植物を育てなかった吉田進が、仕事柄贈られる各種の種苗を渡していたのが、園芸学者であり日本園芸学会の副会長も務めた福羽逸人です[7]。福羽は、新宿御苑で作出した国産いちご第１号の「福羽いちご」などで知られており、欧州の園芸理論を日本に導入、実践した人物です[8]。

当館の憲政資料室には福羽の書簡が複数残されています。欧州への官費留学に関する書簡からは、園芸への情熱と並外れた行動力、政府高官との恵まれた人脈により、当時必ずしも重要視されていなかった園芸分野を学ぶための渡欧を実現させた様子がうかがえます[9]。

一方、下の書簡には、そんな福羽も驚かせる、熱意と行動力をもった園芸家が登場します。書簡は福羽から、駐ドイツ公使を務めた品川弥二郎子爵に宛てたものです。品川は殖産興業への関心が強く、かつて駐在したドイツからりんご（林檎）の樹を持ち帰っていました。品川からの申しつけにより、福羽が弘前市の菊池楯衛（きくちたてえ）という人物にそのりんごの樹の提供を打診したところ、是非預かり栽培したいと願い出てきました。そればかりでなく、品川への拝謁を希望して福羽のところまで突然やって来てしまったため、とにかくこの紹介状を書いて持たせる……というのが書簡から読み取れる状況です[10]。

菊池楯衛は、現在では「青森りんごの開祖」といわれる人物です[11]。明治初期、政府は欧米の優れた果樹をさまざま取り寄せ、栽培の適地を探るために日本各地に配りました。そうした動きのなかで、菊池は西洋りんごの青森における将来性を見抜き、研究を重ねながら普及に努めました。この突然の訪問も、居ても立っても居られない、りんご栽培への熱心さ故の行動だったのかもしれません。



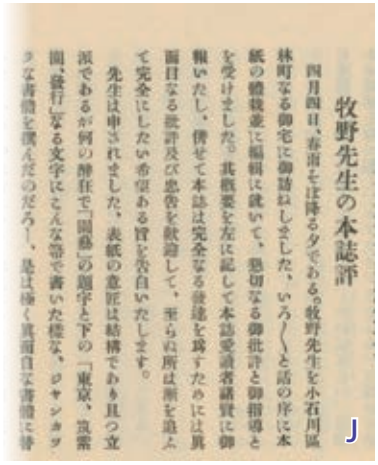
朱線は右から「菊池楯衛」「獨乙（ドイツ）より御持帰り相成候林檎樹」「本日推参」「御面謁被下度（くだされたく）」「添書（紹介状）」。
福羽逸人書簡（明治 22 年頃カ）＜品川弥二郎関係文書（その 1）124-1＞

【参考】青森県清水村（現在は弘前市）のりんご園の様子（明治 41 年）。
『農事雑報』第 11 年（126）　農事雑報社　1908.10＜請求記号 雑 38-15＞

福羽逸人

菊池楯衛

品川弥二郎

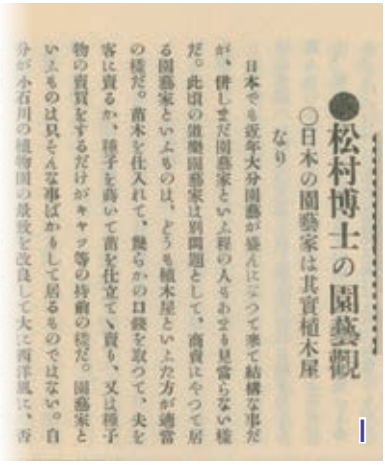


牧野先生の本誌評

四月四日、春雨そぼ降る夕である。牧野先生を小石川區林町なる御宅に御訪ねしさした、いろ〳〵と話の序に本紙の體裁並に編輯に就いて、懇切なる御批評と御指導とを受けさした。其概要を左に記して本誌愛讀者諸賢に御報いたし、併せて本誌は完全なる發達を期するためには異論目なる批評及び忠告を歓迎して、至らぬ所は所を追ふて完全にしたい希望ある旨を告白いたします。

先生は申されさした、表紙の意匠は結構であり且つ立派であるが何の酔狂で「園藝」の題字と下の「東京、筑紫園、發行」なる文字にこんな帶で書いた樣な、ジャンカツな書體を撰んだのだろう、是は極く眞面目な書體に書

J

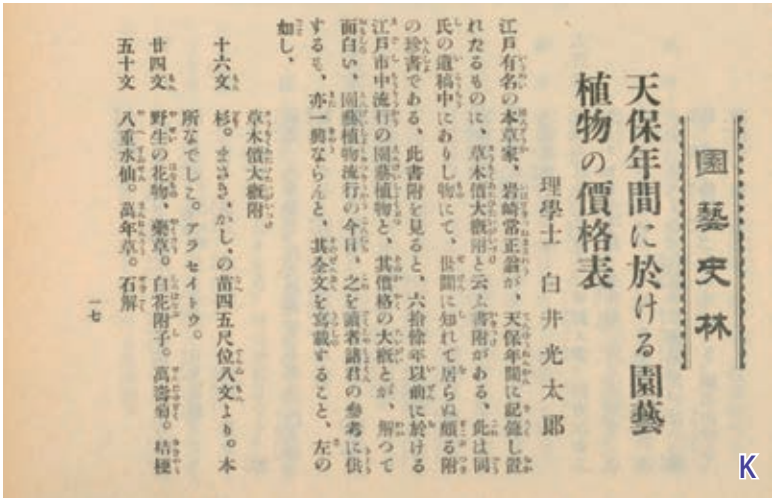


●松村博士の園藝觀

○日本の園藝家は其實植木屋なり

日本でも近年大分園藝が盛んになつて來て結構な事だが、併しまだ園藝家といふ程の人もあまり見當らない樣だ。此頃の道樂園藝家は別問題として、商賣にやつて居る園藝家といふものは、どうも植木屋といふた方が適當の樣だ。苗木を仕入れて、幾らかの口錢を取つて、夫を客に賣るか、種子を蒔いて苗を仕立て〻賣り、又は種子物の賣買をするだけがキャッ等の特産の樣だ。園藝家といふものは只そんな事ばかりして居るものではない。自分が小石川の植物園の景致を改良して大に西洋風に、香

I



園藝史林

天保年間に於ける園藝植物の價格表

理學士　白井光太郎

江戸有名の本草家、岩崎常正翁が、天保年間に記錄し置れたるものに、草木價大概附と云ふ書附がある、此は同氏の遺稿中にありし物にて、世間に知れて居らぬ頗る附の珍書である、此書附を見ると、六拾餘年以前に於ける江戸市中流行の園藝植物と、其價格の大概とが、解つて面白い、園藝植物流行の今日、之を讀者諸君の參考に供するも、亦一興ならんと、其全文を寫載すること、左の如し、

草木價大概附

十六文　杉。さはき、かし、の苗四五尺位八文より。本所なでしこ。アラセイトウ。

廿四文　野生の花物、藥草。白花附子。萬壽菊。結梗

五十文　八重水仙。萬年草。石解

一七

K

H『園芸』（以下同）表紙（1号）。

I「植物説林　松村博士の園芸観」（2号）。

J「雑報　牧野先生の本誌評」（2号）。

K白井光太郎「園芸史林　天保年間に於ける園芸植物の価格表」（2号）。

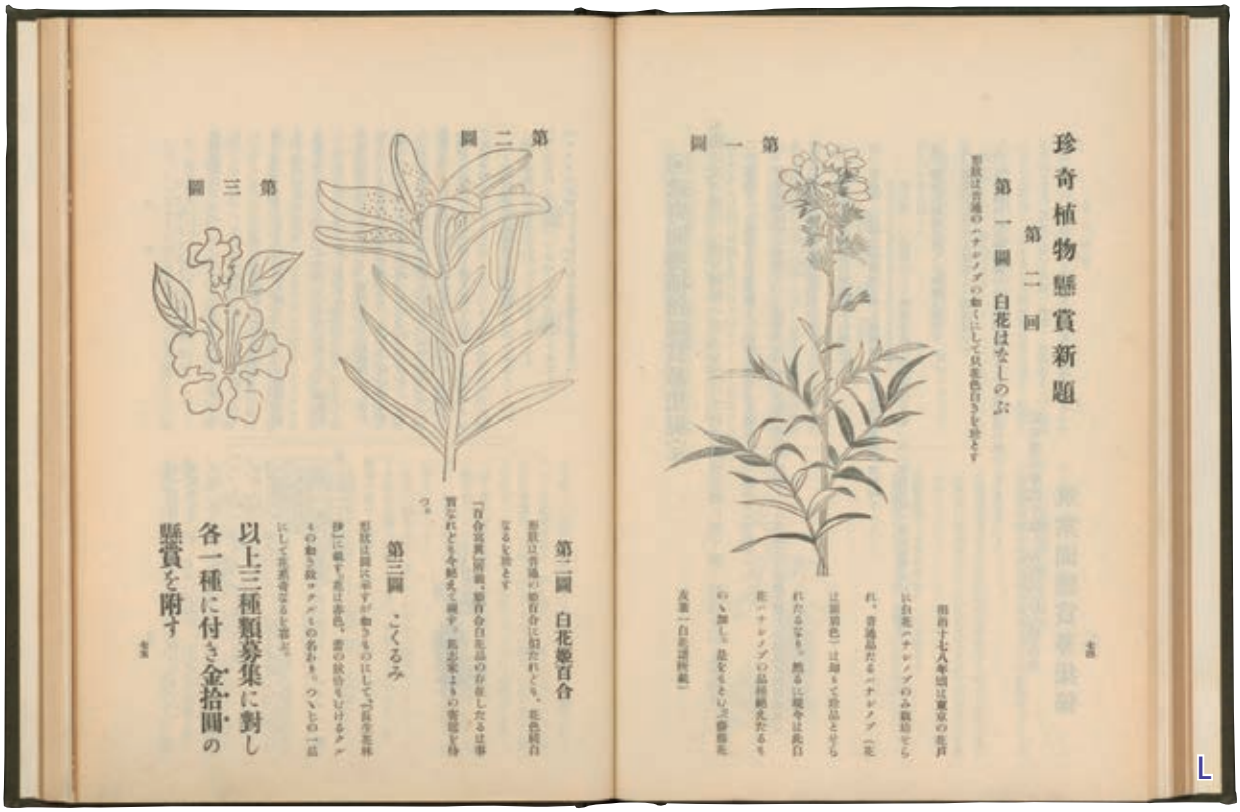
H

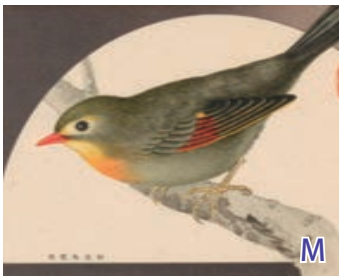
幻の園芸雑誌『園芸』（筑紫園、明治41年4月～6月）

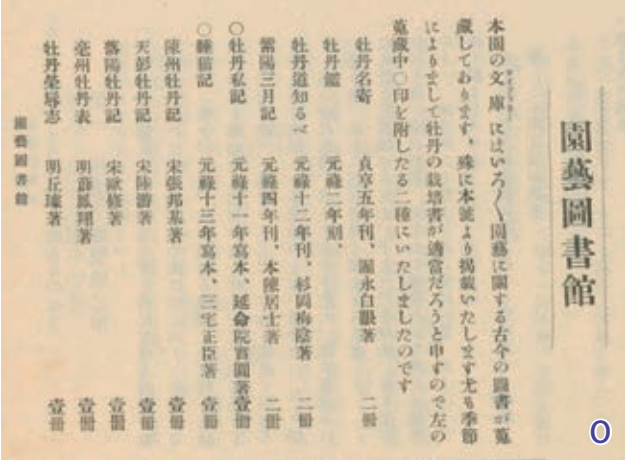
『園芸』は千駄ヶ谷で園芸場「筑紫園」を営む大石進により、明治41（1908）年に創刊されました。牧野富太郎や白井光太郎（東京帝国大学農科大学教授）、松村任三（東京帝国大学植物学教室教授、小石川植物園の初代園長）など、当時の著名な学者による興味深い記事に加え、珍奇植物の懸賞募集や美しい彩色の絵はがきの付録など、意欲的な企画が目を引く雑誌です。

創刊号の「本誌発刊の主趣」では、海外のものばかりもてはやす当時の園芸界の風潮をいさめ、日本固有の植物や古くからの園芸文化の価値を見直し、発展させ、それをもって海外との交易の道を開くことを発刊の最大目的としています。それに加え、加工・装飾園芸や小鳥・観賞魚の飼育といった分野の開発も発刊の目的としており、目次をみると「園芸料理」や「造花思潮」「養禽養魚」といった章が設けられています。

編集兼発行者の大石進は福岡出身でツツジについて造詣が深く、雑誌創刊の2年前には著書『久留米特産霧島躑躅栽培全書』も上梓しています。大石は東京帝国大学農科大学を家の都合で中途退学したのち、故郷で園芸研究を続け、[12] 明治37年に筑紫園を開園しました。[13]『園芸』のそうそうたる執筆陣は、そうした経歴とも関係があるのかもしれません。







L 珍奇植物懸賞新題（2 号）。
M,N 付録の絵葉書（3 号）。毎号カラフルな絵葉書が 2 枚ついている。
O 園芸図書館（2 号）。筑紫園が蒐集した、園芸に関する古今の書物を紹介している。

この雑誌の目玉企画といえるのが、「珍奇植物懸賞」です。かつて日本で栽培されていたけれど、今では見かけなくなってしまった珍しい園芸植物に5～10円の懸賞金をかけて募集するものです。毎号新しい植物が募集されましたが、残念ながら、雑誌自体が3号までしか発行されず、珍奇植物の発見が誌面で発表されることはありませんでした。

明治41（1908）年4月の華々しい創刊からわずか3か月で終わった理由は分かりません。しかし同年7月14日の読売新聞に掲載された「京浜園芸家歴訪録（六）」では、取材当日に「主人大石進は折悪く病辱にあり」と記されており、大石の体調不良が雑誌の継続に影響した可能性も考えられます。

『園芸』は、30年以上後に出版された『日本園芸発達史』のなかでも、観賞用植物を主に紹介した「立派」な雑誌として言及され、3号で終わったことが惜しまれています。[14] 当時の人にとっても、印象に残る雑誌だったのでしょう。

園芸こぼれ話 2

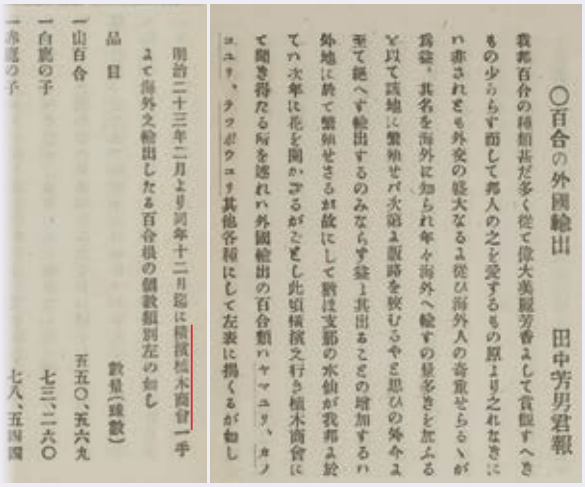
ユリ根の輸出と横浜植木

幕末、日本にやってきた欧米のプラントハンターたちを最も魅了した花は、ヤマユリやカノコユリをはじめ、野山に自生する各種のユリでした[15]。特に純白のテッポウユリは、キリスト教の復活祭において需要が高く、多くのユリの球根（ユリ根）が欧米に輸出されました[16]。

最初に輸出を手掛けたのは、横浜居留地の外国人商社です。しかし、明治 23（1890）年に日本で最初の植物貿易商社、横浜植木が創業したのを機に、日本人による「直輸出（じきゆしゅつ）」が行われるようになりました。その後、ユリ根の輸出量は年々増え、第二次世界大戦が始まるまでの間、日本にとって重要な輸出品となりました。

下の『百合花選』は、横浜植木が発行したユリ 42 品種を収載したカタログです。欧米への輸出のため、英文でも頒布されました。

横浜植木が創業したのは、日本園芸会設立の翌年です。当時の事業の様子は『日本園芸会雑誌』にもしばしば取り上げられ、注目度の高さを感じさせます[17]。創業当初からサンフランシスコを始め多くの海外支店を開設し、積極的に事業を展開した横浜植木は、「海外諸国ニ面シテ起ツヘキ（たつべき）」という日本園芸会の設立主旨を具現化したような存在だったのかもしれません。



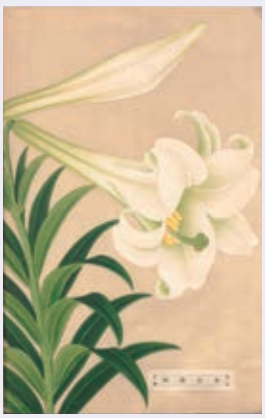
○百合の外國輸出　田中芳男君報

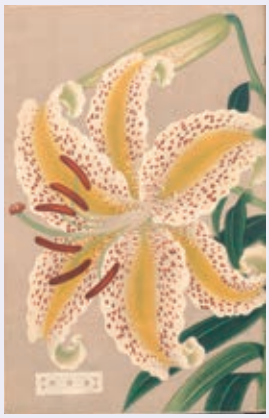
我邦百合の種類甚だ多く從て偉大美麗芳香ゑして賞賞すべきもの少からず而して邦人の之を愛するもの原より之れなきにあらざるも外交の發大なるゑ從ひ海外人の奇重せらるゝが爲め、其名を海外に知られ年々海外へ輸送の量多きを加ふるゑ以て該地に繁殖せしめ次第ゑ販路を開ひらゆやと思ひの外今ゑ至て絶へず輸出するのみならず益ゑ其出ることの增加するゆ外地に於て繁殖せさるは故にして實は支那の水仙が我邦ゑ於てゆ次年に花を開かざるがごとし此頃横濱之行き植木商會にて聞き得たる所を述れゆ外國輸出の百合類ハヤマユリ、カノコユリ、テッポウユリ其他各種にして左表に掲くるが如し

明治二十三年二月より同年十二月迄に横濱植木商會一手ゑて海外之輸出したる百合根の個數類別左の如し

品目	數量（球數）
一山百合	五五〇、五六九
一白鹿の子	七三、二六〇
一赤鹿の子	七八、五四四

（上）『日本園芸会雑誌』22 号より「百合の外国輸出」。
（下）横浜植木の旧本館（横浜植木株式会社画像提供）。





『百合花選 訂正版』横浜植木　1917 序　https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3438472
（上から反時計回りに）表紙、テッポウユリ、ヤマユリ。

P,Q,R 大正・昭和期の画家の森田久による『実際園芸』1巻1号、2号、3号の表紙。季節感が感じられる色鮮やかなイラストが並ぶ。森田は雑誌の表紙や挿絵を多く手掛け、宝塚歌劇の『歌劇』表紙、同じ誠文堂新光社では『科学画報』の表紙も担当している。

S 石井勇義（左）と親交が深かった牧野富太郎（右）。『農耕と園芸』1954年8月号　誠文堂新光社＜請求記号 Z18-406＞

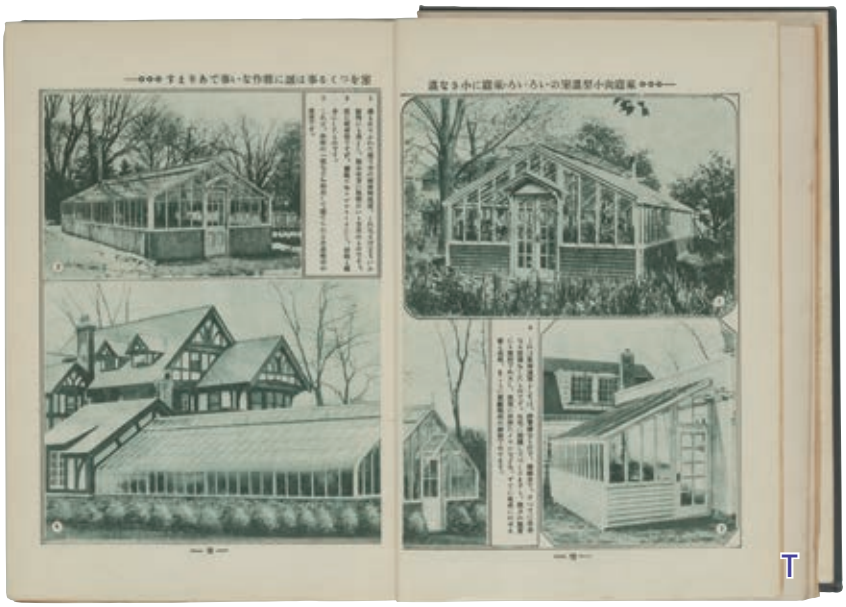
カリスマ園芸家の園芸雑誌『実際園芸』（誠文堂新光社、大正15年10月～昭和16年12月）

最後に紹介する雑誌は、大正15（1926）年に創刊された『実際園芸』です。タイトルが示すとおり、経験に基づいた実践的な園芸の手引書を目指した雑誌です。そのため、非常に多くの写真や図を用い、まさに手取り足取りという姿勢で栽培方法などの解説を行っています。その一方、園芸の歴史を知るための記事や各種の園芸関連情報を掲載し、園芸文化を総合的に楽しむことができるように作られています。

創刊号の「本誌の発刊に際して」の冒頭に次のようにあります。

洋語に「国の盛なる時、園芸必ず栄え、その国の亡びんとする時、園芸まづ衰ふ、園芸は国家盛衰の晴雨計（バロメーター）なり」というが、まことに味ふべき語であると思ふ。[18]

このように述べ、日本に根付きつつある園芸文化の更なる発展のため、趣味の園芸家の手引書となり、



T「家庭向小温室のいろいろ」（2巻1号）。
U 目次（1巻1号）。

生産園芸家にも「斬新なる栽培法」を紹介すると表明しているのが、この雑誌の主幹・編集を務める石井勇義（ゆうぎ）です。石井は自らもイシヰ・ナーセリーの園主として多くの植物を栽培する傍ら、大正14（1925）年から始まったラジオ放送でも園芸講座を担当する著名な園芸家でした。[19] 大正末から戦後にかけて多数の園芸書を著し、経験を織り交ぜた平易で読みやすい文章が人気を博しました。主な著作に『原色園芸植物図譜』（全6巻）や遺作となった『園芸大辞典』（全6巻）などがあります。

雑誌の編集に当たって石井は、自分の経験だけでなく、一般の園芸愛好家からの「実際記録」（実際に栽培した記録）も募集しました。[20] まだ珍しかった外国の植物について、学術的な理論に留まらず、実際に日本の気候等の条件下で栽培した貴重な事例を誌面で紹介できれば、大いに参考になると考えたのでしょう。

しかし、その呼びかけはすぐにはうまくいかず、本意に反して「世間

V「西洋草花の作り方図解・鉢植苗の植換へと床植の仕方」（1巻2号）。
W「秋植球根の植付順序」（1巻1号）。
『実際園芸』のタイトル通り、写真や図を用いて具体的に示している。

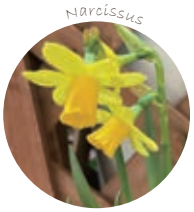
並みの童謡や、田園文学めいたもの」ばかりが集まってしまい、悲観することもありました。当時ほかの園芸雑誌では、そうした文学的な記事をしばしば掲載していましたが、石井は「本誌は、あくまでも、園芸の一本調子で進み度い」と言い切っています。[21]

『実際園芸』は、昭和戦前期の主要な園芸雑誌のひとつになり、[22]戦後は『農耕と園芸』に改題、引き続き石井を主幹として再出発をします。

おわりに

明治以降の近代園芸に魅了され、その啓蒙に奔走した人々と、彼らが関わった園芸雑誌を紹介してきました。

本稿のはじめに、園芸にはさまざまな情報が必要になると書きました。しかし、だからこそ園芸は奥深く、多くの人々を惹きつけてきたともいえます。時代に合わせ、読者にさまざまな情報を提供してきた園芸雑誌は、園芸文化の発展になくてはならないものでした。



※花の写真は筆者撮影。

1 川上幸男「園芸」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジ）
2 大日本農会ウェブサイト「沿革（発足時の目的）」http://www.dainihon-noukai.jp/
3 近藤三雄、平野正裕 著『絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化　秘蔵資料で明かされる、現代園芸・緑化のルーツ』誠文堂新光社　2017　pp.8-13< 請求記号 RB51-L58>
4『実際園芸』12 巻 3 号　誠文堂新光社　1932.7　pp.269-273< 請求記号 YA5-1059>
5『日本園芸会雑誌』1 号　日本園芸会　1889.4　p.3< 請求記号 YA5-1058>
6 筑波実験植物園ウェブサイト「多様性を守る（日本の絶滅危惧植物）」http://www.tbg.kahaku.go.jp/diversity/protect/endangered/conditions/index.html
7 前掲、注 4『実際園芸』12 巻 3 号　p.272
8 一般財団法人国民公園協会　新宿御苑ウェブサイト「新宿御苑の歴史」https://fng.or.jp/shinjuku/gyoen/history/
9 品川弥二郎関係文書（その 1）124-4、124-5（マイクロフィルム番号　R5）
10 品川弥二郎関係文書（その 1）124-1（マイクロフィルム番号　R5）
11 青森県庁ウェブサイト「青森りんごの発展に功績を残した代表的な人物」https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/ringo/ringo-rekisi08.html
12『読売新聞』1908 年 7 月 14 日
13 大石進 著『久留米特産霧島躑躅栽培全書』有隣堂　1906　p.7　https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/840102/7
14 日本園芸中央会 編『日本園芸発達史』有明書房　1975　p.302< 請求記号 DM322-21>
15 前掲、注 3『絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化　秘蔵資料で明かされる、現代園芸・緑化のルーツ』p.68
16「日本花き園芸産業史・20 世紀」刊行会 編『日本花き園芸産業史・20 世紀』花卉園芸新聞社　2019　p.22< 請求記号 DM229-M3>
17 前掲、注 3『絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化　秘蔵資料で明かされる、現代園芸・緑化のルーツ』pp.123-124
18「洋語」と書かれていますが、同誌第 2 号で「実際は、恩師辻村常助先生の、独創の語であった」と訂正しています。
19 前掲、注 16『日本花き園芸産業史・20 世紀』p.503
20『実際園芸』1 巻 1 号　誠文堂新光社　1926.10　p.99< 請求記号 YA5-1059>
21『実際園芸』1 巻 3 号　誠文堂新光社　1926.12　p.306< 請求記号 YA5-1059>
22 岩本熊吉 著『趣味と実用最新園芸』育生社　1939　p.329< 請求記号 775-76>

○その他の参考文献
日本園芸研究会 編『明治園芸史』日本園芸研究会　大正 4< 請求記号 358-86>
福羽逸人 著、環境省自然環境局 監修、国民公園協会新宿御苑 編『福羽逸人回顧録　解説編』国民公園協会新宿御苑　2006< 請求記号 GK54-H51>
「園藝探偵の本棚」『カルチベ－農耕と園藝 ONLINE』誠文堂新光社　https://karuchibe.jp/read/category/tantei/

○ 6 ページの花の画像の出典
パンジー：『実際園芸』2 巻 4 号、ビワ：『日本園芸会雑誌』4 号、シネラリア：『園芸』1 号、クルマユリ：『百合花選 訂正版』

○ 10 ページの肖像の出典
福羽逸人：福羽逸人 著、福羽真城 編『花卉栽培法　福羽逸人遺稿』福羽真城 昭和 6< 請求記号 608-288>
品川弥二郎：電子展示会「近代日本人の肖像」https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/100.html
菊池楯衛：『全国篤農家列伝』愛知県農会　明 43　https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778253/135
※ URL の最終アクセス日：令和 3 年 12 月 7 日

※現在、『日本園芸会雑誌』と『実際園芸』はマイクロフィッシュ、『園芸』はデジタル画像での閲覧になります。
※引用の旧字は新字に、カタカナはひらがなに、旧仮名づかいはママとしました。

仕事の帰り、行きつけの園芸店の店先をのぞくときや、休日に花壇の手入れをするときと同じように、眠る前に園芸雑誌のページをめくるひとときは、園芸好きにとって至福の時間なのです。

『日本園芸会雑誌』3 号よりサクラソウ。

館内スコープ

黒子ときどき夜当番

今日も同じ課の職員が利用者サービスの最前線に立つ中、サービス総括係の私は、黒子のようにひっそりと利用者サービスに携わっています。

開館前、館内に響き渡っていた清掃業者の掃除機の音がやむ頃、利用者スペースを巡回します。本館入口の手指消毒液は毎日大量に消費するため、余裕をみて新しいボトルに交換します。椅子や机等の備品は、定期的に数や状態を点検します。座るとぐらつく利用者用椅子を見つけたため、予備の椅子と交換して事務室に回収することにしました。開館時刻を前に、空のボトルや椅子を抱えて事務室に戻ると、ちょうどインフォメーションカウンターへ向かう職員とすれ違います。

開館のチャイムが鳴ると、課内は徐々に慌ただしくなります。カウンターからの要請で応援に向かう職員を見送りながら、私は回収した椅子を改めて確認。見ると脚のねじがゆがんでいたため、最終的に修理に出すことになりました。閲覧机から車椅子に小型翻訳機まで、大小約2、400点の備品の維持管理もサービス総括係の仕事です。

一段落つくと、今度は投書の整理。館内の投書箱には、日々様々なご意見が届きます。案内が分かりづらいとの指摘に恐縮したり、職員への温かい言葉にほっとしたり。内容に応じて関係部署に回付します。

本来ならば、一般の方の参観対応も、日常業務の一つです。東京本館の利用者スペースや書庫等を巡る参観は、利用者が当館をどのように捉え、何を期待しているのかといった声を聴くことができる機会でもあります。新型コロナウイルスの影響で参観の受入れを停止している今、サービス総括係にとって、投書は利用者とつながる貴重な機会です。

さて、今日は夜当番。毎日の閉館時、入退館カウンターにて、利用者が全員退館したことを確認する当番で、サービス総括係が利用者スペースに出る数少ないチャンスです。当番中は在館者数のデータや退館者の様子を見つつ、利用者対応も行います。普段黒子に徹している分緊張しますが、落ち着いた対応を心がけます。

閉館の音楽とともに全ての利用者を見送り、今日の業務は全て終了です。朝とはどこか違う静けさの館内を、事務室に向かって歩くこの時間が、係の仕事で一番気に入っています。

（サービス運営課 サービス総括係　北帰行）

閉館後の館内。手前の緑のぬいぐるみは、
夜当番の人に回ってくるカエル。

電子資料の長期保存 ABC

そのディスク、まだ読めますか？

国立国会図書館は、所蔵する資料の永続的な利用を保証するため、補修や修復、書庫の環境整備や防災対策といった様々な取組を行っています。

当館が所蔵する資料は紙の資料だけではありません。CD、DVD、USB メモリといった形態の資料に加え、インターネット経由等で収集した物理的な形のないデジタルデータも多く所蔵しています。このような「デジタル資料」について、永続的な利用を保証するには適切な維持管理のための努力が必要となりますが、紙の資料とは様相が異なります。

この記事では、当館にどのようなデジタル資料が所蔵されているのかを紹介したうえで、デジタル資料を長期に保存するにあたっての課題やその対策について紹介します。

（電子情報部 電子情報企画課 次世代システム開発研究室
木下貴文）

デジタルデータとは

情報を 0(ゼロ) と 1(イチ) の並びで表現したものです。連続的な量を表わすアナログデータと異なり、元の情報と全く同一のデータを簡単に複製、転送できます。そのため、いったんデジタル形式でデータが作成されれば、基本的には情報の品質が変わることはありません。

ただし、データを記録した媒体が物理的に破損すると、データは当然消失してしまいます。また、デジタルデータはそのまま人間が認識できる形式ではないので、利用にあたっては何らかの再生環境（機器、ソフトウェア）が必要になります。

当館所蔵のいろいろなデジタル資料

フロッピーディスク（FD）

▶容量　数百 KB ～数 MB 程度

▶たとえばどんな資料?　官公庁の報告書、ソフトウェア、図書の付録、電子ブック等

1970 年代から 1990 年代頃まで広く用いられましたが、現在ではほとんど使われていません。また、カビの発生等により読取ができなくなることがあり、長期的な保存に適しているとは言えません。

MO

▶容量　128MB ～ 640MB 程度

▶たとえばどんな資料?　官公庁の報告書等

複数回の書き込みが可能であり、1990 年代から 2000 年代頃に用いられました。当館は 3.5 インチのものを 100 点ほど所蔵しています。

データ書き換えのリスクがあり、ドライブ等の再生環境も入手が難しくなっているため、今後もこの媒体にデータを記録しつづけることは推奨できません。

USB メモリ

▶容量　数 MB ～数 100GB

▶たとえばどんな資料?　学会や国際会議の予稿、データベースソフト等

2000 年代に登場し、現在も広く使われています。

データの書き換えが容易に可能であるため、誤操作によるデータ消去や上書きのリスクがあります。データの持ち運び等が主な用途であり、長期的な保存用途での使用が意図された媒体ではないと言えます。

名刺サイズで、端子が折りたたまれたタイプもあります。

ミニディスク（MD）

▶容量　140MB 程度

▶たとえばどんな資料?　音声資料等

1990 年代から 2000 年代に、主に音声データの記録媒体として広く用いられましたが、現在ではあまり使われず、再生機器の生産も終了しています。

加えて音声ファイルの記録フォーマット等も独特であり、長期保存には適していません。

有形の記録媒体を持つこれら「パッケージ系電子出版物」以外に、紙の資料をデジタル撮影したデジタル化資料や、電子書籍・電子雑誌、ウェブサイト等の無形の資料もあります。それらは電子書庫（国立国会図書館デジタルコレクションの提供データを保存しているサーバ）等に保存されています。

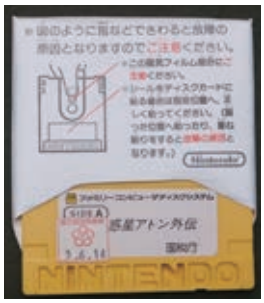
光ディスク（CD・DVD・BD）

▶容量　700MB 程度～ 100GB 程度

▶たとえばどんな資料?　音声・映像資料をはじめ多岐にわたる

CD は 1980 年代、DVD は 1990 年代から 2000 年代にかけて普及し、現在でも使用されています。データの破損等のリスクが他媒体より比較的少なく、適切な保管環境を用意できれば、ある程度の長期的な保存には適しています。しかし、規格（-R/-RW 等）によって劣化の進行速度が大きく異なり、特に書換型（-RW）の光ディスクは相対的に速く劣化することが知られています。そのため、規格ごとに異なった対策を講じる必要があります。

こんな資料も所蔵しています



左の写真の資料は「惑星アトン外伝」というタイトルで、なんと国税庁が制作したゲームソフトです。任天堂の「ファミリーコンピュータ」のディスクシステムを用いれば遊ぶことができます。

残念ながら当館にはファミリーコンピュータ機器の所蔵がなく、動かしてみることはできませんが、国税庁のサイトによれば、平成 2（1990）年の「税を知る週間」の際、親子で楽しめるコンテンツとして制作されたもののようで、中身としてはクイズゲームだとのことです。

（上）惑星アトン外伝　国税庁 1990 年

（下）参考：アニメ惑星アトン　租税教育用ビデオ　税の働き

国税庁 監修、日本税務協会 企画、大蔵財務協会税のしるべ総局 企画・制作　1990 年

1990 年代頃には、「デジタルブック」「電子ブック」等と称して、FD、CD 等各種媒体で電子書籍が販売されていました。当館でもそのような資料を所蔵しています。

専用のリーダーも発売され、持ち運んで再生することもできました。

書庫では、媒体別に並べています。取り出しやすいよう、舟箱とよばれる紙の箱に入れることが多いです。

デジタル情報長期保存の課題と対策

課題

紙と違う!!

記録媒体に物理的な破損があると影響が甚大

- 微細な破損でもデータが読み取れなくなることがあります。
- 一部でもデータが欠損すると、内容の全てを読み解くことができなくなることがあります。

媒体の寿命が紙と比べると短い

- 記録媒体の寿命は長いものでも数十年程度とされています。
- 対応する再生機器が維持できなければ意味がなく、再生機器にも寿命があります。

改ざんや上書きが容易

- 媒体によっては簡単に痕跡なく書き換えることができます。そのため、データの内容が本当に保存当初から変わっていないのかについての確認が難しいと言えます。

ソフトウェア等の利用環境の維持も必須

- データだけではなく、再生ソフトウェアも維持しなければなりません。
- OS や、OS を動かすハードウェアも維持が必要です。

対策

バックアップ

- デジタルデータは完全な複製ができるので、複製して予備を持っておくことでデータの破損などの不測の事態に備えることができます

媒体変換

- デジタルデータをより安全な記録媒体に移すこと（マイグレーション）で、長期的に保存することができるようになります。

利用環境の維持

- 旧式化した再生環境の物理的な維持に加え、旧式化した再生環境を仮想的に再現する技術（エミュレーション）等によって、この問題をある程度解決することができます。
- 維持できなくなったソフトウェア用のデータを別の同種のソフトウェアで使えるファイル形式に変換する（マイグレーション）という方法もあります。
- ただし、いずれも元の環境を完全に代替できるとは限りません。

※マイグレーションは、媒体変換のみを指す場合と、ファイルフォーマットの変換も含む場合があります。

デジタル資料の「保存」という概念は歴史が浅く、世界的にも紙に比べれば取組が大きく遅れている状況です。そもそもデジタルデータ自体まだ比較的新しいものであり、この記事で扱ったような課題が大きな問題として意識されることは決して多くありません。

しかし、私たちの身の回りを見ても、デジタルデータの重要性が今後飛躍的に増すことは間違いありません。その保存も、必ずや今後大きな課題となることでしょう。

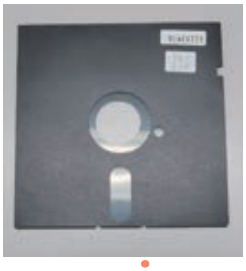
数十年、数百年後の未来の人たちにも現在の文化が伝えられるよう、これからも日々の保存対策のための技術調査を進めていきます。

5 インチ FD のマイグレーション作業

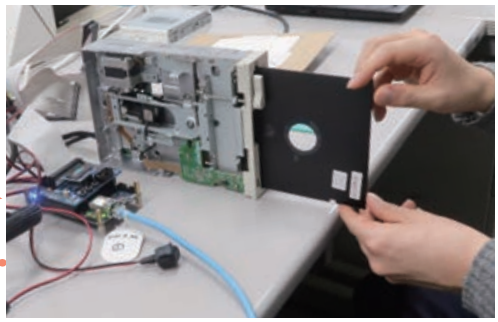
現在、次世代システム開発研究室で行っている、具体的な作業の一例をご紹介します。

フロッピーディスク（FD）は比較的データが消えやすい媒体です。放っておくと危険なので、別の媒体にデータをコピーしましょう。
調査のために FD 付き資料を取り出すと、CD のケースくらいのサイズの黒いペラペラの紙みたいな物が※！

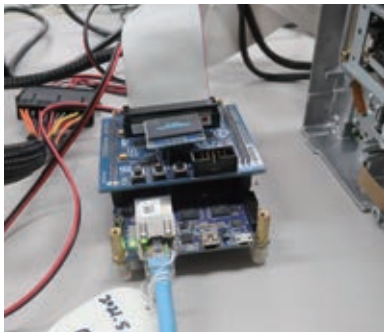
※「floppy」（だらんとした）と呼ばれる所以です。



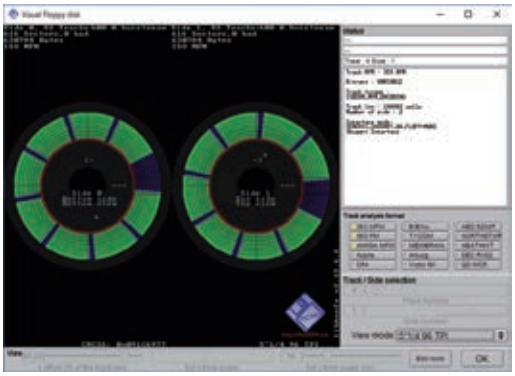
普通イメージする FD（3.5 インチ FD）とはちょっと違いますが、これも立派な FD です。5 インチ FD 等と呼ばれることが多いですが、正確には 5.25 インチです。1980 年代から 1990 年代には記録媒体としてよく使われていました。容量はこれ 1 枚で最大 1.2MB 程度です。現在からするととても少ないですね。（CD でも約 700MB、DVD は約 4.7GB）



ドライブはもう生産していないので、中古のものを用意しましたが、今の PC には繋ぐ口がありません。
はたして、繋げたところで今の PC でデータを正常に読み込めるのか……。



当館では、今の PC でも 5 インチ FD ドライブを操作できるようにする特殊な機器を用意して、その機器経由でデータを読み込みます。



0(ゼロ)1(イチ) に復元される前の生の信号のままデータを取得することができました！　これにて FD からのデータの吸出しは一段落です。

しかし、まだデータが取り出せただけ。できたのは普通の方法では読めないファイルです。FD のデータを丸ごと保存できたとしても、利用できなければあまり意味がありませんね。
今の PC で使える形式に変換するのか（ファイルフォーマットの変換）、はたまた今の PC 内に使える環境を仮想的に再現するのか（エミュレーション）……挑戦はつづきます。

国立国会図書館で働いてます

Season2

no.5

運命の出会いの現場に立ち会っています

今どんなお仕事をされていますか。

来館しなくても当館の蔵書のコピーを受け取れる遠隔複写サービスを担っています。職員のほかに、複写箇所特定業者といって、複写申込書と実際の資料を突き合わせて複写箇所を確認する方、それから実際に複写作業を行う複写受託センターの方と、いろんな人が関わっているんですよ。特定業者の方が資料の複写箇所にしおりを挟んで、複写受託センターにそのまま流すものが大半なのですが、資料が傷んでいるとか、箇所が特定できないとか、著作権法上、提供できる範囲を超えているといった場合は、職員に回ってきて、必要な確認をしたり、場合によっては利用者の方に問い合わせたり、お断りする、という仕事をしています。

関西館でも同じような部署がありますね。

加藤さんのインタビュー[1]ですね。だいたい同じなんですけど、東京本館は古典籍資料室とか憲政資料室とか専門室が多くて。専門室の資料に関しては職員で担当を決めて、毎日、各専門室に出納を依頼して、出納されたら自分たちで特定しています。

専門資料の複写箇所を特定するのって難しいのでは？

難しいですね。私の担当は憲政資料室の資料で、プランゲ文庫のマイクロフィッシュを見ることが多いんですけど、重複コマ、たとえば同じコマを濃淡変えて取っている場合を見落としたり。ただ、複写課では内容を読み込むということは基本しないんです。利用者の方が事前にレファレンス[2]とか、記事掲載箇所調査[3]で、ここからここまでってしっかり特定していただいて、その上で複写を申し込んでもらうっていうのが一番理想です。なので、申込みのあった複写箇所が、目次を見ても見つからなければ、レファレンスを案内しています。

遠隔複写って、いろんな工程があるんですね。

利用者の方が資料そのものを見ていないので、慎重に確認してます。よくあるのが、保存のために何冊かの資料を合わせて製本しているものだと、綴じの真ん中のところが時には2～3行見えなかったりする。利用者の方が実物を見ていないから、コピーが手元に届いたときに「なんで写ってないの」ってなっちゃう。だから、資料の状態によっては事前に

服部 菜都子　利用者サービス部　複写課　遠隔複写係

平成23（2011）年4月　調査及び立法考査局　国会レファレンス課　文献提供係
平成25（2013）年4月　調査及び立法考査局　国会レファレンス課　連絡調整係
平成26（2014）年4月　調査及び立法考査局　外交防衛課
平成27（2015）年10月　電子情報部　電子情報流通課　情報流通係
令和3（2021）年4月　利用者サービス部　複写課　遠隔複写係

（1）本誌2020年7/8月号（2）公共図書館、大学の図書館等で解決できないレファレンス（資料についてのご相談）を、それらの図書館経由で国立国会図書館に依頼していただくことができます。（3）個人の登録利用者の方を対象として、コピーのために特定の記事や論文の掲載箇所（巻、号など）を調査するサービス。

問い合わせするんですよ。こういう状態ですけど、いいですかって。

電話ですか？

基本は電話なんですけど、つながらない時はメールに切り替えます。

一日何回くらい電話をかけてますか？

日によりますけど、ずっと誰かしらが電話してます。1台、遠隔複写専用の電話があるんですけど、だいたい誰かが電話かけたり、かかって来たりして。私この4月に異動してきて「なんて忙しそうな職場なんだろう！」って思って（笑）。あと、肉体労働。資料を運んできて確認して、複写業者の方に持っていって。だから加藤さんのインタビューで「工場」って表現されていたのは、本当にそのとおりだなと。

利用者の方と接するのは電話とメールだけですか？

遠隔複写とは別に、来館複写のカウンター当番もあるんです。マニュアルが分厚くて、研修も1か月以上。同じ業務をする人が何十人もいるので、齟齬が出ないように。

来館だとその場で判断しなくちゃいけないですもんね。

じっくり悩んでられないです。でも、遠隔複写の経験が糧になっているというか、判断の役に立っているなと。じつは学生の頃に来館複写を利用したことがあるんですけど、その時の記憶では複写カウンターが自分の頭よりも1mか2mくらい高い壁の上にあったような。

壁の上にある!?

緊張しすぎて、心の壁を物理的な壁の記憶に書き換えてたのかなって（笑）。だから今はなるべく利用者の方に敷居を感じさせないように気を付けてます。

やりがいはどんなことでしょうか？

日々いろんな資料に触れられることですね。どんな分野にも専門誌ってあるんだな、とか。人の営みの多様さっていうんですか。果てしない気持ちになるんですよね（笑）。

果てしない気持ち！

蔵書の分野の多様性に目がくらみそうになって。すごくマニアックな辞書とか、大学のゼミの発表資料を束ねて刊行した資料とか。出版しただけじゃなくて、複写したい人がいる。運命の出会いの現場にいるっていうんですか。

運命の出会い（笑）。

だからこそ、コピーを受け取った時に、残念な気持ちになってほしくないなって願っています。「こんなはずじゃなかった」っていうのは、お互いに悲しいので。だからみんな毎日、一所懸命問い合わせしてますね。「遠隔」といっても、けっこう利用者の方との距離は近くに感じます。個人の方ともそうですし、図書館経由でも申込みが入るので各地の図書館の職員の方ともお話しします。コピーを入手したらいったん、当館での目的は終わるわけじゃないですか。だから一つのゴールですよね。ここまでくるのにどれくらい苦労したんだろう、と思うことがあります。だから、無事に入手できて喜んでもらえたらいいなって、いつも思っています。

◆◆◆

調査及び立法考査局国会レファレンス課文献提供係ではどんなお仕事をされていましたか。

国会議員事務所から依頼された文献を提供してました。隣の連絡調整係の仕事の一部を手伝っていて、調査の依頼の電話を受けて、各課に振り分ける仕事、あとたまにレファレンスもやらせてもらったりしていました。その後、連絡調整係に異動になって、本格的に調査の依頼の受け付けで、その時も一日中電話（笑）。

（上）誰が複写箇所特定などの作業をしているかを示すために資料に挟む札。（下）複写受託センターへの指示や利用者の方へのご連絡のため、複写申込書に押すハンコなど。

複写申込書を専門室ごとに仕分けている棚。

その後、外交防衛課に異動されましたね。

調査業務の担当としては国際法の分野で、先輩職員にいろいろ教えてもらって勉強になりました。文章を書く作業が多かったので、文章を手早く書く、いいトレーニングにもなりました。

ちょうど安全保障関連法案の審議が行われていた頃でした。調査の依頼があったら新聞の記事をすぐに提供できるように分類して整理して、っていう作業も一所懸命やっていました。ピーク時は、紙面の半分くらいが安全保障関連法案に関する記事だったんです。どう整理しておけば目的の記事にすぐアクセスできるか。賛成反対で分ける、有識者が書いた論説、連載記事かそうでない記事か、とか。新聞だけじゃなく雑誌も。整理して分類して提供する、ある意味、図書館っぽい仕事かも？

国政審議のために資料を準備しておくってことですもんね。

私が異動した後も、便利だねって活用してくれた方がいたそうです。漫然と新聞データベースを検索するだけでは何百件もヒットしちゃうので、どうしたら効率よく必要な記事を探せるのかはいつも考えていましたね。

電子情報部電子情報流通課情報流通係ではどんなお仕事をされていましたか。

ウェブサイト上のコンテンツの二次利用、「転載」の窓口です。これは保護期間満了だから問い合わせ不要ですよ、これは許諾がないとダメですよ、というお返事をしたり。出版社やマスコミの方からのお問い合わせが多かったです。

あと、それとは別に、ひなぎく（東日本大震災アーカイブ）も担当していました。決裁文書の起案が多くて、起案文書作るのがけっこう楽しかったです。

それは珍しいですね。

公的機関って、文書がすべてじゃないですか。紙1枚が、あるイベントを開催する根拠になったりする。命が吹き込まれるみたいで、面白いなって。

なるほど。

ひなぎくは、いろんな機関のデータベースを一度にまとめて検索できるっていうポータルサイトなので、メタデータを手動で加工しなければいけないことがあって。それまでエクセルってまともに使ったことなかったんですけど、ひなぎくではもう、何百件、何千件のデータを扱うので、関数などデータを一気に処理する方法を覚えました。

以前、館内スコープを書きましたね。[4] エクセルで他機関からきたデータをひなぎくに合うように変えたりするんですよね？

目視で全部は見られないので、専用のソフトを使ってデータの差分をあぶり出す。機械的にものをみる、っていうのが初めての経験でした。

◆◆◆

大学時代、トルコ語を勉強されていたとか。

もともと特にトルコに強い関心があったわけじゃなくて、英語が好きで語学をやりたいなと思って大学は決めたんですけど、せっかくだからあまり人が勉強していない言語を勉強してみようかなって。

大学では、トルコ語の新聞を翻訳してウェブサイト上に載せるプロジェクトに参加させてもらったりして、楽しかったです。学園祭ではトルコ語の劇もやりました。

それでなぜNDL（国立国会図書館）を目指そうと思われたんですか？

大学の卒業生でNDLの職員が大学のパンフレットに載っていたんで

(4) 本誌2017年3月号

す。入学の前後だったかな、「こんな道があるんだ！」って。その時はそれだけだったんですが、大学2年生の頃、就職説明会にＮＤＬから説明してくださる方が来て。「語学だけの仕事じゃないけど、語学とゆるくつながって活かしていけるかもしれない仕事ですよ」って話をされて、あ、いいかもなって。それに、過去の知識を蓄積して未来につなげていくというところが、まぶしい感じがしました。

まぶしい感じ（笑）。ところで、ピアノがお上手だとか。

3才から、高校3年生まで習っていました。学校の勉強が忙しくても毎日練習しないといけないのがしんどくて。コンクールとかも出させてもらって。

それはすごい！

地方の小さいやつなんですけど、成績は全然芳しくなかったですよ。でも、大学に入学して住んだ学生寮にピアノがあったんです。時間１００円で貸してくれて。高校までは、毎日の練習とか本番への苦手意識とかで、ピアノが嫌になりそうなときもあったんですよね。でも大学ではそういうプレッシャーがなくて楽しく弾けました。今思えば続けてきてよかったなって。

お子さんお二人にもピアノを習わせてたりしますか？

全然です。上が4歳半で、下が2歳で、家に一応私の電子ピアノがあるんですけど、息子たちは道路としか思っていなくて、鍵盤をミニカーが走っていくんですよ。黒鍵と黒鍵の間の白鍵を駐車場に見立てて遊んだり、ひどいです（笑）。

そうなんですね。今は子育てが大変って感じですか？

子育て、仕事、以上、みたいな毎日ですね（笑）。今、育児時間をとっていて、本当にありがたくて。周りの人、職場と保育園のおかげとしか言いようがないです。

休日は、家の中にいると子どもが暴れまわるので、公園に連れて行ってます。でも私、砂場あそびとか苦じゃなくて。子どもの遊びって極めると面白いんですよ。たとえばプラレールでも、分岐を作りすぎると1回も通らない線路ができたりして、もはや数学だなって（笑）。

◆　◆　◆

今後、ＮＤＬはどうなっていったらよいと思いますか。また自分はどう働いていきたいですか。

基本的な役割は変わらないと思うんですけど、いい意味で、変化に柔軟にというか、やり方は柔軟に、社会の要請とか時代の要請にこたえて変わっていけるのがいいのかな。自分も仕事をするときに、小さなことなんですけど、何のためにやっているのか、本当にこれが一番いい方法なのかなっていうのを考えるようにしています。なんとなく今までやってきたから、ではなくて。

あと、以前の上司で「完璧を求めがちだけど、失敗から学ぶものがあるから、別に多少失敗してもいいと思ってる」っておっしゃった方がいて。何かあったら責任をとってくださるからこそだと思うんですけど。全員がミスなく完璧にというのも大事だけれども、得意不得意あるから、それぞれのいいところを伸ばして、補い合って、チームとして結果を出していければいいんじゃないかって。

いいですね！

もちろん、「失敗してもいいや」って思って仕事するのはダメですけど。失敗した時に、それをちゃんと報告できるかがすごい大事だと思うので、事前に、「多少の失敗は仕方がない」って言われていると、何かあった時に報告しやすいですよね。私も人のいいところをなるべく見るように、誰にでも得意不得意があるからお互い様っていう気持ちで過ごしています。尊敬できる上司や同僚がたくさんいて、日々刺激になってます。

駐車場と化している電子ピアノ

ミニ電子展示「本の万華鏡」第30回

天下タイ平

～魚と人の江戸時代～

島国である日本は海に囲まれていることはもちろん、川や湖の美しい淡水にも恵まれ、魚介類は身近な存在として古くから人々の暮らしに浸透していました。

平和で安定した世となり、また交通網の整備が進んだことで商品の流通が活発化した江戸時代。魚介類をめぐっても様々な変化がありました。ミニ電子展示「本の万華鏡」記念すべき第30回では、江戸時代を舞台に魚介類と人とのお付き合いの様子を「とる」「売る」「食べる」という3つの側面からご案内します。当館所蔵の江戸時代の魚図鑑を使った魚介類難読漢字クイズもお楽しみいただけます。どうぞご覧ください！

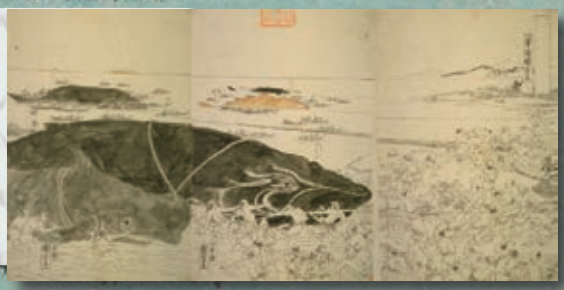
お品書き

とりタイ！

江戸時代にはさまざまな漁具や漁法が発達し、漁業も大きく進歩していきました。錦絵や名産図会に描かれた日本各地の漁の様子をご覧ください。

コラム　鯨とのお付き合い

古来日本人の重要な栄養源であり、また生活のための道具の材料としても用いられた鯨。その漁の様子や弔いのために作られた鯨塚など、鯨と人のお付き合いをご紹介します。

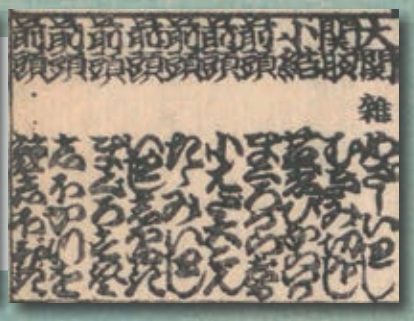


売りタイ！

冷蔵庫も冷凍庫もなく、流通にも時間がかかった時代。生鮮食品の保存には工夫が必要でした。魚介類が加工や市場を通じて、商品として人々の手に渡る様子をご紹介します。

食べタイ！

日々の食卓に並んだ庶民のおかずから外食屋で人々が舌鼓を打った鮨や鰻の蒲焼まで。江戸と上方を中心に魚介類の食文化をご紹介します。



付録

魚介類難読漢字クイズ

この漢字は何と読むでしょう？

「鮟鱇」

ヒント

正解はサイトで！

「本の万華鏡」は国立国会図書館の様々な資料を、インターネットでご覧いただける展示会です。スマートフォンからの閲覧にも対応しています。お手元のスクリーンから資料の世界をお楽しみください。

https://www.ndl.go.jp/kaleido/entry/30/

本の万華鏡　検索

本屋にない本

「本」を出すには、まず「紙」が必要だった。終戦直後はその「紙」が足りず、当局との交渉のために業界団体が必要となった。また出版流通に欠かせない取次業を独占していた「日配」がGHQから閉鎖機関に指定され、より広い範囲での連帯が必要になった……。

本書は全国出版協会（全協）の歴史を、こうした黎明期から語り起こしていく。用紙割当の統制廃止、出版物の事業税免除の実現など、第1章の前半部では終戦直後の混乱した時代に全協がかかわった活動が描かれている。そしてその後半部からは、現在に至るまでの全協の事業の柱となる「出版科学研究所（出科研）」が登場する。出科研は出版流通にかかる「科学的」研究と調査を志向しており、統計資料やその分析データの作成、刊行を続けている。

第2章では、その出科研の歴史が記述される。それぞれの時代の出版を取り巻く社会の変化に応じて統計・調査手法を変えつつも一貫して「科学的」データにこだわり、出版文化を把握しようとしてきたその道程が、具体的な数字の変遷とともに語られている。すなわちこの第2章は、出科研のみならず、出版業界の歴史である。

特に「2-5」は各年のベストセラーや創刊誌・出版業界の動向などがまとめられており、戦後出版界の状況を一通り見ることができる。文学書では1946年に『腕くらべ』の再販が、1956年に『太陽の季節』が、1968年に『竜馬がゆく』がベストセラーとして挙げられており、時代の空気を感じる。

第3章では「雑誌 創刊・休刊点数」など、テーマごとにデータが見開き・図表付きで掲載され、解説が付されている。例えば「文庫本」の項目では、スマホの普及との関連がグラフで示されており、我々が肌で感じ取る変化をデータの視点から裏付け、振り返ることができる。

第4章は趣を変え、全協が「文字・活字文化振興法」の公布・施行に伴って開始した、「高橋松之助記念顕彰事業」と「朝の読書」の関連事業が紹介されている。「朝の読書」は毎朝の始業前の10分、教師と生徒が自分で選んだ本を一斉に読むという活動で、私自身、この活動で高校時代にシュリーマンの『古代への情熱』を読んだ記憶がある。こうした地道な読書の普及活動が、結果として出科研が扱うようなマクロなデータに影響を与えていくのだろう。

本書は全協というひとつの団体だけでなく、出版のために必要だったものが「紙」から「流通網」、そして「データ」へと移り変わっていった70年を多角的に通覧できる一冊だと言えよう。戦後の出版業界を学習・研究するにあたって是非一度、手に取って頂きたい。

（千歳 誠之）

※本書は全国出版協会ホームページでPDFが閲覧可能です（3章のみ有料）。

全国出版協会70年史
1949-2019
全国出版協会・出版科学研究所
2020.5　103p；30cm
<請求記号 UE3-M2>

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

関西館資料展示（第29回）「結構毛だらけネコ本だらけ」

突然ですが、あなたはネコが好きですか？　のんびりマイペースなところがいい？　ふわふわの毛？

たとえ苦手でも興味がなくても、ネコは人と生活圏を長く共にしてきた身近な存在であることは確かです。ネコが人に飼われるようになったのは、はるか新石器時代まで遡ると言われています。神聖な存在として信仰の対象になる一方で、狡猾・不気味といった理由から虐げられるなど、時代や文化によっても、ネコへの対し方は様々。その近しい存在ゆえに人に翻弄されてきたともいえます。近年は飼育頭数がイヌの数を超え、更にステイホームの影響を受けたペットブームによりその数は増えています。

本展示では、ネコの諸相を、科学・生物学、ネコと人との文化・社会的な関わり、表現・創作物のモチーフといった観点から、当館所蔵の文献を用いてご紹介します。２０２２年２月という、ニャン（２）続きのこの時に、ネコ好きもそうでない人も、ネコを知りこれからの共生を考えてみませんか。

○開催期間　2月17日（木）～3月15日（火）
　※日曜・祝日を除く
○開催時間　9時30分～18時
○会場　関西館閲覧室（地下1階）
○問合せ先　関西館資料案内
　電話　０７７４（９８）１３４１

『百猫画譜』仮名垣魯文編、立斎広重 画、和同開珍社　明11<請求記号 209-312>
仮名垣魯文の発刊した雑誌『魯文珍報』からネコの特集号を単行本としたものです。挿絵のネコは三代歌川広重によって描かれたもの。

また、関連講演会を次のとおり開催します。ぜひご参加ください。

○演題　もっと知りたい！ネコごころ
○講師　髙木佐保（麻布大学特別研究員）
○日時　2月26日（土）14時～16時
　※講演後、当館職員による展示紹介を約10分行います。
○定員　１００名（事前申込制・先着順・参加費無料）
○開催方法　オンライン開催（Webex Events使用）
○申込方法　講演会のページに掲載している申込フォームからお申し込みください。
　ホームページ>サービス・国会関連情報>イベント・展示会情報>展示会ページ>講演会ページ

中国国家図書館とのオンライン業務交流

令和3年11月30日に中国国家図書館（ＮＬＣ）との業務交流をオンライン形式で実施しました。

両館の館長による会談後、当館からはＡＩ技術を用いて開発した実験サービス「次世代デジタルライブラリー」を中心に、次世代システム開発研究室の調査研究活動とその成果について、ＮＬＣからは「全国スマートライブラリーシステム」構築プロジェクトの基本構想と、インフラ構築、ナレッジコンテンツの統合・管理等の重点的取組についてそれぞれ報告し、質疑を行いました。

資料のデジタル化に伴う原資料の利用休止について

国立国会図書館では、所蔵資料の保存と利用の両立を図るためデジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。このデジタル化作業のため、次のとおり一部の資料の利用を休止します。

○東京本館所蔵の国内刊行雑誌等　62タイトル
　約2、620冊
○東京本館所蔵の議会官庁資料　21タイトル　約405冊
　→利用休止期間：令和4年3月25日から9月30日まで（予定）
○関西館所蔵の博士論文　約6、000点
　→利用休止期間：令和4年3月16日から9月30日まで（予定）
○関西館所蔵の旧植民地刊行雑誌等　13タイトル　約80冊
　→利用休止期間：令和4年3月16日から10月7日まで（予定）

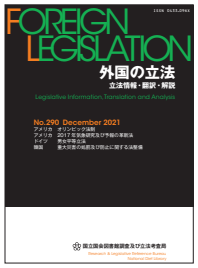
※ご利用いただけない資料は、国立国会図書館オンラインの書誌詳細画面の所蔵一覧で、「作業中　デジタル化のため」の表示でお知らせしています。ご利用にあたっては、事前に検索してご確認ください。
※詳細については国立国会図書館ホームページ＞資料の保存＞資料デジタル化について＞デジタル化作業に伴う原資料の利用休止について に掲載しています。

ご不便をおかけしますが、国民の文化的資産を後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

新刊案内

外国の立法　立法情報・翻訳・解説　第290号

アメリカのオリンピック法制―オリンピック・アマチュアスポーツ法を中心に―
アメリカの2017年気象研究及び予報の革新法
ドイツ連邦共和国における男女平等立法―第2次指導的地位法に至るまで―
韓国の重大災害の処罰及び防止に関する法整備



A4 167頁 季刊 1,980円（税込）
発売　日本図書館協会
ISBN　978-4-87582-886-0

レファレンス　852号

小特集「国民投票運動におけるインターネット利用の規制」
＜緒言＞
国民投票運動におけるインターネット利用の規制（解説）
英国のレファレンダムにおける投票運動規制―その現状と
　インターネット上の投票運動への導入に向けた動向―
フランスの国民投票運動におけるインターネット利用の規制
アイルランドにおけるオンライン政治広告の規制をめぐる
　動向―憲法改正国民投票の観点から―
カリフォルニア州における州民投票とインターネット広告規制
EU炭素国境調整措置構想の概要と課題―WTO協定との
　整合性及びパリ協定との調和―
国際機関の分担金・任意拠出金

A4 131頁 月刊 1,100円（税込）
発売　日本図書館協会

カレントアウェアネス　350号

紀要論文等の書誌情報流通における課題と「文化財論文ナビ」の取組
教員と連携した情報リテラシー教育の実践―名古屋大学附属図書館の取り組み―
大学カリキュラムへの情報リテラシー教育の統合に関するモデルおよび理論
＜動向レビュー＞
電子書籍を中心とした公貸権制度をめぐる2005年以降の国際動向
＜研究文献レビュー＞
東日本大震災と図書館

A4 28頁 季刊 440円（税込）
発売　日本図書館協会

入手のお問い合わせ
日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812

2

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2022.2

NO.730
FEBRUARY
2022

CONTENTS

01 <Book of the month - from NDL collections>
INAKA—Hiking with foreign residents of Kobe

06 Strolling in the forest of books (27)
Horticultural magazines during the Meiji and Taisho eras and pioneers of modern horticulture

19 The ABCs of long-term preservation of electronic materials
—Are those disks still readable?

24 Working at the NDL, Season 2 Episode 5

28 Kaleidoscope of books (30)
Catching, selling, and eating fish in the Edo era

18 <Tidbits of information on NDL>
Work behind the scenes, sometimes even at night

30 <Books not commercially available>
Zenkoku shuppan kyokai 70nenshi

31 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 松浦 茂

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
https://www.ndl.go.jp/

令和4年2月号（No.730）
令和4年2月1日発行

印刷所 株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（https://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

ISSN 0027-9153

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

2022.2

国立国会図書館
National Diet Library, Japan

国立国会図書館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。